

---

# 砂漠の帝国軍人

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

砂漠の帝国軍人

### 【Nコード】

N0069W

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

混迷極める北アフリカ戦線。連合国側の一翼を担うフェアリーランド王国軍に、1人の帝国陸軍少佐が収容がされたことで、物語が始まる。

漫画「砂漠のウサギ」二次創作。

## 1 目 次

北アフリカ戦線。そこは現在に至るまで多くの人々の興味を惹く場所だ。何故ならかの地においては、かつて枢軸国と連合国による熾烈な戦闘が繰り広げられたからだ。

規模だけを考えるならば、ロシアや西欧で繰り広げられた戦いは及ばない。しかしながらロンメルやモントゴメリー、ベルタと言った名だたる指揮官たちに率いられた各軍が繰り広げた戦いとそのドラマの内容は、勝らずとも劣らないだけの魅力を持っていた。

特に北アフリカ戦線において寡兵ながらよく活躍したフェアリーランド王国軍の戦いは、同軍の主力を少女たちが占めていた分も含めて、今なお人気が高い。

一方で、そんな北アフリカ戦線は大戦中も各国の興味を引く戦線であった。そのため多数の観戦武官が枢軸・連合軍に従軍していた。

この物語は、そんな観戦武官の一人が体験した物語。

1942年2月 北アフリカ戦線

「やっと終わったわね」

戦車のキューポラから頭を出したメイア少尉は、未だに硝煙のキツイ臭いが鼻につく戦場を見渡しながら言った。そこには十数台の戦車が煙を噴き上げていた。いずれもロマーニヤ陸軍の主力である

M13やP26戦車であった。

「中隊長より全車へ。イタ公どもは遁走したわ。これより生存者の捜索にかかるわよ」

無線越しに中隊長であるコノリー大尉の声が響いた。

「了解。ロイス、前進して。イタ公の生存者がいないか探すわよ」

「OK」

操縦手のロイス伍長は戦車を前へと進めた。だがそこに広がっていたのは……

「うわー。これで生存者なんかいるのかしらね？」

あたり一面撃破されたM13戦車やその他の車両の残骸が燃え上がり、そして至近弾による弾痕で地面は穴ぼこだらけであった。見た限り生存者がいる気配は無い。

「とにかく、探すだけ探しましょう。見つからなかったらそのまま戻ればいいだけだし」

「そうだね」

メイアの支持の下、55号車の3人は付近に生存者がいないか探し始めた。しかし、案の定生存者が見つかる気配はない。

「こりゃ探すだけ無駄じゃないの？」

探し始めてから5分もしない内に、操縦手のロイスが欠伸をしなから言う。不謹慎ではあるが、メリアにもとても生存者がいるとは思えなかった。

「そうね。戻りましょうか」

とメリアも諦めた時。

「メリア！いたよ！」

装填手のモーリス軍曹の声であった。

「いたって何が？」

「生存者よ生存者」

「へえ、よく見つけたわね。それで、どこにいるの？」

「その撃破された装甲車の横。今フラワーが診てるんだけど、驚かないですよ。どうやらそいつ、イタ公じゃないらしいのよ」

「イタ公じゃないならなんのよ？ドイツ、それともオリュンポス？」

「そうじゃないのよ。どうやら東洋人みたいなんだけど、見たことも無い軍服着ているからよくわからないのよ」

「ふーん。まあいいわ、とにかくそいつのところまで行きましょう」

メリアたち3人は、その謎の人物がいる所まで歩いて行った。

モーリスの言ったとおり、撃破されたイタリア軍の装甲車のそばにフラワーが腰を降ろしていた。どうやら誰かを診ているようだ。

「フラワー！」

「あ、メイヤ」

「そいつが見つけた奴ね？一体どこの人間？それにケガの具合は？」

「ケガは大したこと無い。直に目覚めると思う。ただどこの人間かまではわからない」

「そう。とりあえず、その捕虜を見せてよ」

「うん。この人」

メイアはフラワーが診ていた人物をマジマジと見る。歳は30代前半か20代前半と言ったところだろう。この戦域では見慣れないカーキ色の軍服を着込み、モーリスが言っていたとおり黒髪の東洋人の顔立ちをしていた。

「確かに見慣れない制服ね……けどこの服どこかで見た覚えが……」

メイアは必死になって、記憶の引き出しの中身をひっくり返す。

「確かに東洋人だね。けどドイツ軍のパチモンみたいな制服なんて採用している国あったっけ？」

ロイスがボロクソに言うが、彼女も男の軍服がどこの軍までかは思い出せないらしい。

「フラワーも知らないの？」

ロイスの間に、フラワーは首をブンブン振った。

と、ようやくあーでもないこーでもないとぶつくさ言っていたメ  
アの頭の上に、電球が点灯した。

「あ、思い出した！この服は確か日本軍よ！」

「「「日本軍！？」「」」

「間違いないわ。首都で何度か駐在武官だったかが、この服を着て  
いるのを見たわ」

「な、何で日本人がこんなところに！？日本は確かイギリスとアメ  
リカとは戦争していたけど、うちの国とは戦争していなかったんじ  
ゃ？」

「知らないわよ。とにかく、連れて行って大隊長と中隊長に報告し  
ましょう。ロイス、55号車を急いで回してちょうだい」

「了解」

「モーリスは無線機で司令部へ報告して頂戴」

「わかった」

「フラワーは55号車が来るまで、そいつをしっかりと見ていて」

「うん」

「うーん……ハッ!?ここはどこだ!?……て痛!」

男は起き上がるなり、呻きながら頭を押さえた。

「ちょっと大丈夫?外の傷は大したことないみたいだけど、頭を打ったみたいだから安静にしていた方がいいわよ」

「……あんた誰だ!？」

「英語はわかるかしら?イタリア語じゃ聞き取れないんだけど」

「英語?……ああ、大丈夫。話せるよ」

「随分と訛ってるわね」

「しばらく使ってたからね……て、ここはどこだ!?!?と云うかあんたは誰だ!?!」

「ようやくその質問ね。私はメイア・ヴァン・ペルト少尉よ。感謝してよね、あなたをここまで連れてきたのは私達なんだから」

男が周囲を見回すと、テントの中で自分はベッドに横たわっていた。どうやら野戦病院か何からしい。

「その制服……フェアリーランド軍か!?!?と云うことは俺は捕虜に

なつたのか？」

「それについてはこれから上の人たちと話し合うことよ。何せあなたの国と私たちの国は、敵対国だけど敵国じゃないからね」

「まあな。おっと、失礼した。杉下薫帝国陸軍少佐だ」

「え！？少佐！失礼しました！」

メイアが立ち上がると、慌てて敬礼をした。彼女は帝国陸軍の士官だとはわかっていたが、自分よりはるかに上の佐官とは思ってもいなかったのだ。

「ところで、ここはどこだ？」

「こゝ、ここは我が軍の駐屯地内の野戦病院です。場所については軍機に触れるためお教えできません」

「まあ、普通はそうだろうな」

と、途端にテント内が賑やかになった。

「失礼するわよメイア」

「中隊長！」

メイアは後ろからやってきた女性に立ち上がると敬礼した。

「いいのよ。それよりも、そちらが？」

「はい。日本軍の少佐だそうです」

「そう。初めまして、少佐。ダリア・コノリー大尉です」

「帝国陸軍少佐杉下薫だ。君が最先任か？」

「はい。現在大隊長は用があつて基地を離れており、今は私が最先任です」

「そうか。それで、俺はどうなるのかな？もし捕虜と言つことなら……」

杉下はチラツとベッドの脇に置かれた自分の軍刀を見た。

「その件なんです。我が軍では基本的に直接交戦中ではない枢軸国の将兵に対しては、枢軸国支配地域へ送り返すことにしています」

「ほう。フェアリーランドがローマーニヤとオリュンポス以外の国と直接参戦せず、衝突を避けていると言つのは本当みたいだな」

「我が国は無用な争いを好みませんから」

「だが送ってもらえるのならありがたい。ぜひともそうさせてもらおう」

「わかりました。ですが少佐はしばらくは安静の必要がありますし、戦線の動きにも注意しなければなりません。ですので、少々時間を下さい」

「わかった」

「理解していただき感謝します。ところで、少佐は何故あそこに？」  
「詳しいことは言えないが、観戦武官として大使館から派遣されている。それ以上は言えない」

利敵行為になる可能性のことは、一切言わない。軍人として当然のことであった。

「それだけで結構です。それから、大使館へ連絡したほうがよろしいでしょうか？」

「お願いする」

「わかりました。さっそく部下に命じておきます」

「感謝するよ大尉」

「では少佐。ゆっくりお休みください。それから、メイア。ちょっといいかしら？」

コノリーは立ち上がるとメイアを連れて、そそくさと野戦病院となっているテントから出て行った。

「イギリス軍に捕まらなくて良かったぜ」

コノリーを見送った杉下は、日本語でそう呟いた。

「ちょっとあんたたち。何やってるの？」

テントから出たところで、コノリーはテントを覗き込んでいた

「す、すいません大尉！」

「男の人が運ばれるなんて珍しいことだから気になって」

「もう。すぐに任務に戻りなさい！気の抜けすぎよ！早く戻らないと減給にするわよ！」

「「「ひええ！」「」」

コノリーに一括された兵士たちは、一目散に逃げて行った。

「さて、静かになったところで。メイヤ、悪いんだけどあんたの小隊の兵士で、あの少佐を監視しておいてくれない」

「え！？何故ですか？」

「念のためよ。スパイのようなことをやられちゃたまらないわ」

「それはそうですが。何でうちの小隊にお鉢が回ってくるんですか？」

「あなたの小隊があの人を見つけたんだからに決まっていますでしょ」

「そんな横暴な！」

「と・に・か・く。頼むわよ。何もあなた1人でやれって言ってる

んじゃないんだから。頼むわよ」

「ええ！？ちよっと中隊長！」

言うだけ言って、コノリーは言ってしまった。

「行っちゃった……仕方が無いわね」

「と言うわけで、あの少佐をうちの小隊で監視することになりました」

「えー！」

「面倒くさい！」

「嫌デスヨー！」

メイアの言葉に、小隊員たちから一斉にブーイングが出た。

「仕方がないでしょ。命令なんだから。ほんの数日のことだから、我慢してやりなさい」

命令と言うことで、結局皆押し黙った。

「それで、監視ってどうやるの？」

モーリスの質問に、メイアは少しばかり考えて口を開く。

「まあ順番決めて、交代で近くにいるだけでいいでしょ」

「順番は？」

「公平に阿弥陀くじで決めましょうか」

メイアは土の上に阿弥陀を描き、小隊員の監視の順番を決めた。

「と言うわけで、ヘレン・クリストファー伍長デース！よろしく頼みマース！」

「ああ、よろしく」

こうして、杉下少佐が後の回想で「軍人としてもっとも奇妙奇天烈かつ、もっとも楽しかった時間」と書いた3日間が始まった。

1 目 次 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

## 1日目 2

ジー……

「……あのさ、伍長」

「何デースか？」

ベッドに横たわるカーキ色の軍服を着た男、杉下薫日本陸軍少佐はすぐそばに椅子を持ち込んでジーと自分を見つめているツインテールの少女に、ジト目で言う。

「そのジーツと見つめるのやめてくれないかな？気が散るんだけど」

「でも、私は今アナタを監視中デース」

フェアリーランド陸軍に保護された日本陸軍の杉下。幸いフェアリーランドとは直接の交戦国ではないので捕虜ではない。そして軍という組織である以上、監視を受けるというのも納得できる。

しかしながら、どうみても子供にしか見えない少女にジーツと見つめられるのは、帝国陸軍の基準に照らせば普通ではない事態であった。

もちろん杉下も観戦武官としてロマーニャに派遣されていたのだから、フェアリーランドと言う国について全く無知ではない。

フェアリーランドはと言うわけか、生まれてくる男女比が3対7なのだ。そのため、女性を社会のあらゆる役職に組み込まなければ

ばやっつていけない。

帝国陸海軍においては、軍属以外に女性を採用することはマズ無い。第一まず女性が男性に対して権利を制限されている国なのである。

加えてその他の国でも、まだ大々的に軍隊に女性を採用していない時代である。だから知識としては知っていても、やはり大いに違和感を感じずにはられないのだ。

「もういい。ところで、クリストファー伍長だったな？」

「はい。そうデース。クリスと呼んで下さい」

「それでクリス伍長、君は歩兵なのかい？」

「いいえ。私は戦車兵デース！」

「ほう戦車兵」

「そうデース！カ〇タデリバリーズの一員デース！」

「なるほど。だから君はカワ〇キャラなんだね。まあメタルのほともかく、そうなると操縦手かな？」

「違いマース。照準手デース！走りながら撃つのが得意デース！」

「走りながら……ほう。そうなると、行進間射撃ということか。そりゃスゴイ！」

杉下は感嘆の声を上げた。この時代戦車の照準装置に関する技術は未熟で、人の技術や勘に頼る部分が大きく、停車しての射撃が普通であった。だから行進間射撃が得意と言うのは、スゴイことであった。

もつとも、それはフェアリーランドの戦車にある秘密も大きかったが。

「そう言えば、さっきの戦いでやたら走りながら発砲して命中弾を叩き出している奴がいたな。ちらっとしか見えなかったけど、確か5Xとか描いてある奴だった」

「それ私が乗ってる戦車デース！」

「そうだったのか。俺の乗っていた装甲車は君たちの砲弾にやられたんだよ」

すると、

「そ、それはスイマセーデス！」

「いや、君は軍人としての本分を尽くしたんだから別に悪いことじゃないぞ。むしろ見事に当たったことを賞賛したい。それに君の戦車は一回り小さな砲を使っていたな。そのお陰で爆散せずに済んだし……それにしても良い腕だ。男だったら是非とも我が軍に欲しいくらいだ」

「ありがとうございマース！」

「ところで、さっきから気になったんだが、君の英語は私程ではな

いが鈍っているな」

「それは多分私がアメリカ生まれだからだと思いきや」

その言葉に、杉下の表情が苦々しいものとなる。

「あ、アメリカかね」

「はい。私はアメリカのカリフォルニア出身デース！」

クリスは笑いながら言ったが、杉下としては複雑な気分であった。何故なら日本は今アメリカ相手に戦争しているのだから。

「ふむ。そうになると、フェアリーランドへ移住したと言っことかね？」

「そうデース。パパが貿易商なので」

「そうか。軍に入ったのはやはり徴兵かな？」

「はい。それで、少佐の訛りは何でデースか？」

「私はロマーニヤ駐在が長かったからね。一応ヨーロッパ各国を回ったから、ドイツ語と英語も出来ることは出来るが、一番得意なのはイタリア語かな」

「だからさっきロマーニヤ軍と一緒にいたんですか？」

「それ以上は機密だから言えないな」

「エエ！？自分ばかり話させてズルイデース！」

「ああわかったわかった。任務については話せないが、昔話くらいはしてやるよ」

「ありがとうございマース！」

「俺は岐阜の山奥の農家の三男坊でね、もう父親からもらえる土地がないのは確かだった。だから自分自身で身を立てるしかなかったんだ。かと言って、大学に行かせてもらえる状況にはなかったからな、仕方が無く士官学校へ進んだんだ」

「つまり食うために軍人になったと言うことデースか？」

「はつきり言ってくれな。だがまあ、はつきり言えばその通りだ。しかしなあ、こう見えても士官学校じゃ恩賜の銀時計を貰ったんだぞ」

「銀時計？何デースかそれは？」

胸を張って言ったのに、聴き返されてしまい杉下は少々がっくりする。

「そうか、外人にはわからないか。恩賜の銀時計は士官学校の成績優秀者に天皇陛下から与えられる贈り物のことだよ」

「おお！王様から授けられるとはスゴイデース！」

「それで卒業して、俺は騎兵科に配属になったんだが、すぐにロマニーヤに留学になってな」

「何でロマーニャ？」

「端的に言えば他に行く奴がいなかったからかな。まあ、ロマーニャも悪いところじゃないよ。飯は美味しい、景色もいいし。ただ軍隊についてはね……」

言葉を濁す杉下を見て、クリスマスも苦笑いするしかなかった。

「それでまあ、ロマーニャに駐在武官としていたわけだね。観戦武官としてついていったらこの有様だよ。たく、君たちの国の方がまだやる気があるぞ」

「あたりまえデース！イタ公なんかには負けマセーン！」

「その意気やよし。ロマーニャ人もドイツ人くらいに働いてくれれば良いんだけどね」

杉下が溜息を吐くと、彼らの元にお盆を持ったメイアがやってきた。

「少佐殿。食事をお持ちしました。そしてクリスマス、交代よ。ここからは私が引き継ぐわ」

「わかりました。それじゃあ少佐」

「ああ。楽しい会話ありがとう」

すると、メイアがクリスをジロツと見る。

「クリス。あんた余計なこと喋ってないでしょうね」

「じゃ、喋ってマセーンよメイア少尉！」

「その通りだよ少尉。彼女とは他愛もないことを話したただけだ」

「そう。ならいいけど」

「じゃ、じゃあ私は失礼します」

そう言つと、クリスはさっさと行ってしまった。

「たく。どうぞ少佐。お食事です」

「ありがとう少尉。パンに缶詰にスープか。まあ、戦場でこれだけ出せれば上等だろう」

「言っておきますが、量は保証しますが味は保証しかねます」

「うん？どれどれ？」

とスープに口をつけた杉下の顔は、微妙なものになる。

「まあマズイとまではいかんが、確かにイタリア料理と比べちゃいかんだろうな」

途端にメイアの表情が変わる。

「あら？嫌な顔しないんですね？我が軍の食事は兵士からとても不評なんですよ。特にその乾燥ジャガイモと乾燥ほうれん草のスープ

は

「そうかい？そりゃイタリア軍やドイツ軍の食事よりかは落ちるが、別に食えない程じゃないだろ。むしろ、これだけの食事を最前線で食べさせてもらえるだけでもありがたいと思わんとね」

この言葉にメイアは飛び上がらばかりに驚く。何せフェアリーランド軍の食事は自軍兵士からさえ「マズイ」と評価されるような代物だった。

それを杉下は独伊のものより味は落ちるが、マズイとまでは行かないと評した。

「ちよちよつと少佐殿。あなた味覚大丈夫ですか？」

「そう言われても、俺日本人だしね。味覚が違うのは仕方が無いと思っよ」

正論を言われ、メイアとしては反論し難くなる。

「そりゃそうかもしれませんが」

「やっぱり兵站とかじゃこっちの方が進んでいるんだな。戦場で兵士が腹一杯食えるんだからな」

杉下はメイアに聞こえないようにボソツと言った。

日本陸軍が決して兵站を無視したと言っわけではないが、食料などを現地調達すると言っことが珍しくない。そのため、兵士が充分な食料や弾薬なしで戦わなければならぬことも珍しくなかった。

「何か言いました?」

メイアは目ざとく聞き取っていたが、もちろん自分の恥を公言するようなバカでは、杉下はなかった。

「いいや。ところで、メイア少尉。君はクリス伍長の上司なのかな?」

「はい。私の小隊に彼女が配置されています」

「そうか。いい部下を持ったようで君は幸せだねメイア少尉」

「光栄であります」

「それと迷惑掛けてすまないね」

「いえ、これも任務ですから。ところで少佐、どうしてイタリア軍についていたんですか?つくならドイツ軍の方が良かったんじゃないですか?」

「まあ、その辺りは色々と言えない理由があるんだよ」

杉下は自分の任務に関する一切言おうとしなかった。

「ところで、メイア少尉の乗車はもしかして55号車かな?」

「あ、はい。そうですね。それが何か?」

「いや、なんでもない」

その後は特に意味のない会話をただけで、夕食の時間は終わった。

1 目 目 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0069w/>

---

砂漠の帝国軍人

2011年9月4日12時35分発行